

闘病記感想文入力用紙

つくり、
つくりかえ、
つくる。

図書館内にある図書を読んで、1,200字以内で感想をまとめて下さい。

書名：闘病記専門書店の店主が、がんになって考えたこと

著者名：星野史雄

出版社：産経新聞出版

発行年（西暦）：2012/9/28

学籍番号（224-21002） 氏名 浅見 東吾

闘病記専門書店の店主が、がんになって考えたことを読んで、私は読むことと生きることのつながりについて深く考えさせられた。本書の著者は、闘病記を専門に扱う書店を営み、多くの患者や家族が書き残した言葉に寄り添ってきた人である。しかし、自らががんを告知されたことで、これまで本を通じて接してきた他者の病いが、突然自分自身の現実として立ち現れる。そのとき著者が何を感じ、どのように考えたかが、率直な言葉でつづられている。

まず印象に残ったのは、がんという病気が恐怖や不安だけでなく、他者とのつながりを考える契機にもなるということだ。著者は、がんを宣告された直後には強い動揺を覚えながらも、これまで読んできた闘病記の一つひとつを思い返し、そこに込められた言葉が支えとなったと述べている。自分の書店に集まってきた本が、今度は自分の心を助ける存在となる。この循環に、読書の持つ大きな力を感じた。

また、本書では病とともに生きるという視点が繰り返し強調されていた。がんと聞くと、どうしても死や終わりを強く意識してしまう。しかし著者は、病を抱えながらも日常をどう生きるかという視点に立ち返る。その姿勢は、病気を持たないわたしにとっても重要な示唆であった。人は誰しも、いつかは命の有限性に直面する。だからこそ、今の生活を丁寧に味わい、人との関わりを大切にすることが、生きる上での大きな意味を持つのだと気づかされた。

さらに、著者の店主としての立場も興味深かった。闘病記というジャンルは、一般的な書店では大きく扱われることが少ない。しかし、そこには確かに誰かの生きた証があり、同じように悩む人に届く可能性がある。著者は、自分が病になったことで改めてその重みを実感し、一冊の本が人の人生を支えることがあるという信念を強めていた。私は普段、本を読み終えるとすぐに次の本へと移ってしまうが、この姿勢から一冊の本と真剣に向き合うことの大切さを学んだ。

看護学生として特に心に残ったのは、病気を特別な出来事ではなく生活の延長として受け止めようとする著者の姿勢である。患者さんの多くは病によって生活のあり方を大きく変えざるを得ないが、その中でも自分らしさや日常をどう保つかが重要になる。私はこれまで実習で、治療や検査に目を向けがちで、患者さんの生活背景や気持ちに十分配慮できなかったことを反省している。本書を読み、病いとともに生きる人に寄り添うためには、身体面だけでなく精神的な支えや日常の小さな喜びをどう守るかを考えることが看護の役割だと改めて感じた。

闘病記専門書の店主が、がんになって考えたことは、単なる一人の体験記ではなく、生きることと本を読むことの意味を問う普遍的な一冊だった。そして看護学生としての私に、患者さん一人ひとりの物語に耳を傾け、病気の中でどう生きるかをともに考える姿勢を持ち続けたいと強く思わせてくれた。